

## 人権 を雅に

藪本 増田さんはヴァイオリンで弾き語りをなさる。とても珍しいスタイルだと思いますが、ヴァイオリンはいつから始められたのですか？

増田 5歳のときです。もともと父がギターの弾き語りがとても上手な人で、子どものころからすごく憧れていました。

藪本 お父さまはギターでどのような曲を？フォークとか？

増田 いや、結構ロックっぽいものやハワイアン、カントリーなどいろいろです。僕は生まれたときから弱視だったこともあって、両親は僕に音楽の教育を受けさせたかったみたいなんです。でも僕はすごくギターに興味があつて、ギターが弾きたいと言ったら、両親はしめたところ、「ギターが弾けるようになるにはヴァイオリンが弾けないといけない」って。

藪本 ギターとヴァイオリン、全く別物という気がしますが……

増田 そうですね。でも結構夢中になって、ヴァイオリンを弾

きました。その後、中学生になり、友達とバンドを組むことになったとき、あ、そうだ、僕はギターがやりたかったのだと思っ、ギターを弾いたら、やっぱ弾けましたね。

藪本 へえ。ご両親のおっしゃった通りに。

増田 はい。だから、あなたが、うそでもなかったなど。絶対音感も身につけていたので、聴いた曲をすぐに覚えられたのがよかったですね。

藪本 でも、プロになるには大変な努力があったのでしょね。

増田 もちろん、今も理想として表現方法、音色はずっと先にありますし、まだまだ練習しなくてはいけないけれど、今の瞬間に全力投球することしかできない。それをつらいと思っ、たことはいけません。音楽は日常の中にあっ、たし、音楽と共に生きていくというこ、とは、考、えるまでもなく、全力投球することだと思っ、ていましたからね。

●壁はない  
藪本 影響を受けたヴァイオリニストは？

増田 一番影響を受けたのは、ステファン・グラツペリというフランス人のジャズ・ヴァイオリニストですね。

藪本 ジャズとクラシック、ギターとロック。何でも取り入れて、独自のものを作り出している感じですね。

増田 そうですね。僕にはジャンルの壁みたいなものは全然ありません。それは音楽に限らず、結構いろいろなところで、壁は感じていないですね。

藪本 音楽に限らずというのは？

増田 いろいろな区分けってあるじゃないですか。これは何、あれは何、とひとくくりにまとめてしまう考え方というのはあまりないですね、自分の中には。

藪本 目が見える、見えないで分けるとか？

増田 例えばそうですね。もち

ろん、区分けが必要なときもあると思います。でも、例えば、日本人、東京都民と言っ、てもいろいろな人がいるように、やはり目が見えない人の中にもいろいろな人がいます。分けたらそれで終わりというものではないですね。

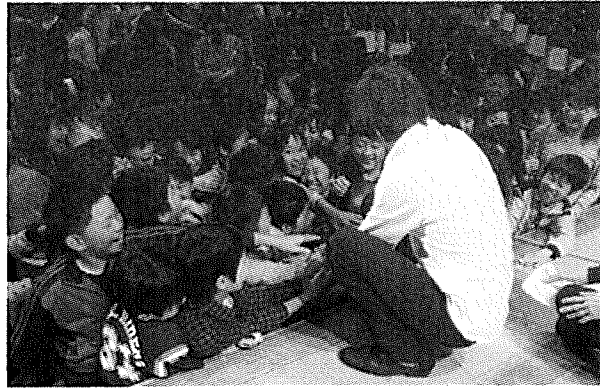
●心と心が響き合う

藪本 ヴァイオリンを弾きながら歌うというスタイルはどうやって見つけたのですか？

増田 あるとき身近な人から提案されてやっ、てみたのです。すると、思っ、いのほか、それをみんなが喜んでくれて、こういうスタイルもいっ、いものだなと思っ、い、現在に至ります。

藪本 弾き語りだけではなく、「講演ライブ」というのも面白いですね。

増田 もつとステージで自分のことを話してみたらどうかと、マネージャーからアドバイスされて。でも実は、最初は抵抗がありました。何もわざわざ自分の目の話なんかしなくても、十



分お客さんと楽しくコミュニケーションできるまで来ていたつもりでしたからです。でも、自分の話をしてみたら、聞いてくださった方が、僕のことではなくて、ご自身の話をホームページや

メールで僕に届けてくれたんですね。それがすごく嬉しかった。自分のことを語ることで人とつながっていく、響き合えるきっかけになるというところが分かったのです。

藪本 自分をさらけ出してくれると、安心して自分のことも話したくなりますものね。

増田 そのとおりです。それにまた音楽があったのがよかったのかなと思います。踏み込んだ自分の話をして、それにつなが

る曲を演奏したときに、皆さんの中で化学反応が起きていることがすごく分かります。

藪本 化学反応ですか。

増田 例えば同じ曲を演奏しても、ある方は亡くなったお婆さまのことを思う。ある方は、昔の自分のことを思う。自分のふるさとのこと、家族のこと、一人ひとりが自分の中にある大切な人や忘れられない風景みたいなものを思いながら音楽を聴いてくれて、そこに僕が話をすること、さらにみんなが自分のことを振り返り、自分自身と対話しながら音楽や言葉に耳を傾けてくれるという……。

藪本 歌だけ歌うのと、自分のバックグラウンドを話してから歌うのでは、やはり違いがありますか？

増田 会場の空気が全く違うと思います。演奏が進むにつれて、どんどん聴く態勢が深くなってくるっていうのかな。みんなが自分自身の中に入っていくことによって空気がわーっと温まって、拍手がまさに笑って

いる感じになります。その中で演奏しているときのえも言われぬ感じ……。演奏の最後に、弓の最後の1本が弦をこすり終わって、しーんとした一瞬の静寂からわーっと拍手が沸き起こる間に呼吸がこちらに向かつて来る感じがあるのです。音楽って、言葉以上に心に届く瞬間があります。響き合えている、一方通行じゃないということを感じるので。

#### ●被災地で感じた人の力

藪本 東日本大震災の被災地でも精力的に演奏活動をされていますね。

お客さんの反応は？

増田 震災から3か月経った6月、福島県郡山市で演奏したときに、アンコールで『ふるさと』を演奏したのです。終演後、1人女性が駆け寄って来てくれて、『ふるさと』の3番の歌詞に心動かされて、私も志を持って明日から頑張りたいと改めて思った、ありがとう……って僕の手をうれしそうにぎゅーっ

と握ってくれました。  
藪本 感動しますね。

増田 はい。それはやっぱり音楽の力であると同時に、人の力だと思います。僕は誰でもみんな、幸せを感じるセンサーを持っていて思っています。毎日忙しくてセンサーの存在を自身で忘れたり、センサーを磨くのをさぼったりしているときが結構あると思うのですが、でも、あるふとしたことがきっかけで思い出すのです。このセンサーがあることを分かったら、また前に進む力になります。音楽って、もしかしたらそういういたものを思い出させてくれるものかもしれないですね。

藪本 東日本大震災でも、音楽のもつ力をすごく感じましたが、それ以上に、音楽を受け取る人の力が大きいということですね。音楽がきっかけになってその力が大きくなる。素敵ですね。

増田 音楽がきつかけになつて、人と人がつながるし、人との関係が広がる。ほんとにみんなそれぞれ悩みや迷いや葛藤がある中で出会い、その出会いを通していろいろなことを感じて、その感じたことを真っ直ぐに自分の言葉で返してくれる。人間って素晴らしいと思う瞬間です。誰もがみんな素晴らしい可能性を持っているということ、を、本当に心から思うし、信じられる。そして、その人はその人、まるごとありのままの自分を信じ抜いたら、それが勇気なのではないかと思うのです。

藪本 今年1月に福島市で法務省と人権教育啓発推進センターなどが開催した人権シンポジウム「福島「震災と人権」でも、コンサートを披露されていますが、いかがでしたか。

増田 僕を迎えてくださる客席の皆さんが、こちらの想いを全身で受け止めてくれていて、そんな息遣いを手に取るように感じながら、歌い、奏で、語らせていただきました。終演後には「涙が出ました」「元気をありがとう」など、たくさんの感想をいただきました。ステージの

最後に「ぼくらが出会えた福島に、大きな拍手を」と呼びかけた時に会場に響いた拍手、今も忘れられません。人権を語るうえでとても大切だと感じている「共に生きている」そんな想いを皆さんと分かち合っていていきいと、心から願っています。

●この夏、大舞台に立つ藪本 近々、ライブの予定とかはありますか。

増田 今年、50年ぶりに東京で国体が行われます。国体と障がい者スポーツ祭というのが一緒になって、『スポーツ祭2013』というかたちで9月に開かれますが、その開会式で演奏することになっています。

藪本 これに合わせて新曲も作られるそうですが。

増田 開会式とオープニングの atrax ションの曲を作ります。明るさ、力強さのある曲にしたいと思っています。

藪本 大舞台、楽しみにしています。本日は、長時間ありがとうございました。

後記 まるごとありのままの自分を信じるというのが私は最も苦手です。それができたらなああと長年思ってきましたが、ようし、勇気を出して今日から信じてみようと思いました。ありがとうございます。（藪本）